

夏風文工を造って

「母なる地に甦る匠の技」

第一回

蝉の声と波の音が入り交じる、
間瀬願龍寺の裏、ビーチボールを
転がせば海まで転がり込むのでな
いかと思わせるような急峻な基地
で、読経し手を合わせる人々があ
りました。

合掌する手に刻まれたシワから、
みんな還暦を過ぎた年代であるこ
とが知れ、瞑想する目はうるみ涙
で光っていました。

石川県鳳至郡門前町は、能登半
島の先端、輪島に近く海に面した
町である。

海辺に立ち周囲を見れば、間瀬
にいと錯覚する。海に迫る斜面
に耕された段々畑、潮風をかぶり
そうなわずかな稲、そんな町です。
海に注ぐ阿岸川を辿って行くと本
誓寺がある。

間瀬の漁港から坂本川を辿ると
間瀬峠に至る。そこに荘厳な寺が
あり——それが能登の名刹本誓寺
である。——と表現できそうな、
春一番に雪割草が咲く、間瀬峠そ
くりな地形であります。

合掌する人たちは、本誓寺当院
阿岸宏照、門徒の徳山まついさん
ら二十名でありました。

——子どもの頃は、雨の日や冬
場は寺の本堂は遊び場、がっしり

としてどんなに騒いでも壊れない
感じ、そして絵本を見るような彫
り物、青年団期の寺は公民館に代
わる集会の場、大人になり目線が
高くなり視角度が変わったのか、
彫られた鳥や花が鮮明に目に飛び
込んでくる感じが強くなった。——

(徳山まつい談)
年代を重ねるとともに、オラが
寺の素晴らしさが見えてきた。

そんな時、岩室からバスで乗り
入れた集団が本堂をなめまわした。
そして平成二年オラが寺が石川県
の文化財になった。と誇らしげに
語る。

差しや梁に力強く彫られた、花
鳥風月、それでいて精緻で繊細に
荘厳さを感じさせる彫刻、これら
の彫刻物は力学的に相当の重量を
支えています。

彫刻師の彫る画一的な題材とノ
ミさばきとは顕著に違います。
これは建築大工が彫刻もする技
量であり、大工彫刻と呼ばれるも
のです。

この阿岸本誓寺は浄土真宗大谷
派、創建年代ははっきりしない。
鎌倉時代の改宗、藩政時代には
鳳至郡百八寺の触頭を勤めたと言
われています。

十三間(約二十三、五メートル)
四面の総かやぶき屋根です。
間瀬大工集団の棟梁、篠原嘉左
衛門(副重)を招き、寛政四年
(一七九二)十二年の歳月を費や
して建立されました。

残念ですが、今はこの縁側は戸
や壁で改修され、内部構造になっ
ております。当時の遺構は風雨に
さらされた痕跡で知れます。
山々を背景に山門よりも数段高
く建ち、縁側から内陣近くまで差
し込む光り、その光りと建物の織
りなすコントラストは、正に門徒
が救求した極楽浄土の世界であり、



本誓寺を検証する岩室村生涯学習のみなさん。

だから二百年を超える歳月を耐
えて現存しているのでしょう
私たちは、この寺の魅力に引き
つけられました。それ以上にこ
の地域の人々と風土にウマが合う、
そんな感じが訪れる度にふくらみ
ました。
潮風に染まった道で出会った老
いた農婦に思わず立ち止まってし
まうこともありました。

手拭いではおかわりし、サンモ
ンを着ている姿、鶴人の海に沈む
夕焼けは、間瀬の海に沈む夕焼け
でありました。

間瀬の西蓮寺は風氣至(ふげし)
姓です。寺伝「元文録」に風氣至
郡輪島鶴人より移人と記されてお
り、能登から移住して来たことが
知れる貴重な史料であります。

この史料によれば、本誓寺の建
つこの地方は、間瀬の母なる地
であり、母なる地に間瀬大工は十二
年、妻子から離れ文化財を建立し
たこととなります。その大工技も
この母なる地から寺の移住とも
に伝来されたことでしょう。

この篠原嘉左衛門(副重)棟梁
の技は子供、孫、曾孫へと相伝さ
れ明治中期まで各地に文化財級の
寺社を建設して行きます。

次号から、これらの人を中心
にして、間瀬大工の出稼ぐ姿と遺構
を追ってみよう。

(岩室村生涯学習推進本部)
——題字・高山雨徑氏——